

黙示録10章「開かれた巻き物」

1A 力強い御使い 1-7

1B 主の来臨 1-4

2B 誓い 5-7

2A 甘く、苦いことば 8-11

本文

黙示録 10 章を開いてください。私たちの黙示録の学びは、ちょうど半ばに入っています。前々回 8 章において、第七の封印を小羊が解かれたら七人の御使いがそれぞれラッパを吹き鳴らしました。そして、七つのラッパのうちの最後の三つのラッパが、特に大きな災いであることを中天を飛ぶ鷲が宣言しました。9 章において、その三つの災いのうちの二つが下りました。底知れぬ所から出て来た、サソリの毒を持ついなごの災いと、ユーフラテス川のほうから二億の騎兵による災いです。まさに、生き地獄を地上にいる者たちが味わいました。そして残る災い、すなわち第七のラッパを吹き鳴らす災いがあるのですが、それが吹き鳴らされるにあたって、力強い御使いが出て来て宣言するところを今晩は読みます。

1A 力強い御使い 1-7

1B 主の来臨 1-4

1 また私は、もうひとりの強い御使いが、雲に包まれて、天から降りて来るのを見た。その頭上には虹があって、その顔は太陽のようであり、その足は火の柱のようであった。2 その手には開かれた小さな巻き物を持ち、右足は海の上に、左足は地の上に置き、3a ししがほえるときのように大声で叫んだ。

使徒ヨハネがまた新たな幻を見えています。それは、「もうひとりの強い御使い」です。黙示録は、天の御使いの活動を数多く描いていますが、旧約聖書ではゼカリヤ書がそうですし、またダニエル書がそうです。私たちは聖日礼拝でダニエル書を学んでいますが、8 章と 9 章で何人かの天使とガブリエルが登場しているのを見ます。そして次週 10 章では、ダニエルが気絶しそうになるほどの、輝きに満ちた御使いが彼の前に現れるのを見ます。黙示録の中では、既に「強い御使い」が出てきていました。覚えていますか、5 章 2 節です、「また私は、ひとりの強い御使いが、大声でふれ広めて、「巻き物を開いて、封印を解くのにふさわしい者はだれか。」と言っているのを見た。」そして 18 章においても、バビロンを神が徹底的に裁かれる時に 18 章で出て来ますが、10 章のこの力ある御使いは 5 章の御使いと関連があります。5 章において、強い御使いが宣言したのは、巻き物を誰がその封印を解くことができるのか、その資格があるのは誰か？と問いかけていることです。そして、屠られたと見える小羊、死んだけれども甦られた方イエスこそが、世界を贖う力と

権威を持っておられることを見ました。この方が流された血こそが、私たちの罪を贖い、私たちを回復し、そして世界を贖い、回復する力を持っておられます。

そしてこの大きな御使いが、「開かれた小さな巻き物」を持っているのです。つまり、七つの封印が全て解かれたその巻き物を手にしているということです。封印されていた巻き物が今は全開しているということであり、主がこれで世界の贖いを成し遂げたという宣言をしているということです。

そして、この御使いの姿を見てみましょう。その姿は、神とキリストの栄光の姿を色濃く表しています。「雲に包まれて」います。そして、「天から降りて来」られています。ダニエル書 7 章で、人の子が天の雲に乗って父なる神の御座のところに近づかれた幻がありました。そして、イエス様が大祭司カヤパの前で、「今からのち、人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見ることになります。(マタイ 26:64)」とされています。そして黙示録 1 章 7 節に、「彼が、雲に乗って来られる」とあります。雲に包まれて、天から降りて来るというところに、主ご自身の再臨の栄光が現れています。そして、「その頭上には虹があつて」とあります。主が、ノアに対して水の裁きの後に、契約を結ばれて地を呪うことはすまいとして虹をお見せになりました。虹は、神が裁かれるけれども、けれども新しい世界、新しい秩序、また安息と平安を与えるという希望を示しています。この虹が、預言者エゼキエルが見た御座の幻のところにあり、そして黙示録 4 章 3 節で、神の御座について「その御座の回りには、緑玉のように見える虹があつた。」とあります。それから、「その顔は太陽のようであり」とあります。マラキ書には、主が義の太陽として現れており、そしてヨハネは黙示録 1 章で、「顔は強く照り輝く太陽のようであつた」と言っています。そして、「その足は火の柱のようであつた」とありますが、イスラエルの荒野の旅の火の柱を思い出します。主が荒野で宿営の民を守ってくださり、また聖さと裁きを表していると言えるでしょう。その姿も、1 章で炉の真鍮のようであると言って、描かれていました(16 節)。

このように天から降りてこられるキリストの栄光を示す御使いの姿は、まるで地上に再臨する時のキリストのお姿のようであり、事実、そのことを示しているのでしょう。10 章には、天からの栄光をこのように描いているのに対して、次回学ぶ 11 章には獣、反キリストが「底知れぬ所から上って来る(7 節)」と書いてあります。天からの栄光と力、地の底からの偽りの栄光と力の対比です。

そして、小さな巻き物を持っている御使いは、「右足は海の上に、左足は地の上に置」いています。海に対しても、地に対しても圧倒的な権威と主権を持っていることを示しています。使徒ヨハネが見たこの幻は、ダニエルがかつて見た幻と似ており、ヨハネはそれを想起していたことでしょう。ダニエルが終わりの日の大きな戦についての幻の後で、その中で我が民ユダヤ人が苦難を受けることを知りました。そして、川の水の上にいる亜麻布を来た人に尋ねました。「この不思議なことは、いつになつて終わるのですか。」と言っています。そして、次の答えがありました。「12:7 すると私は、川の水の上にいる、あの亜麻布の衣を着た人が語るのを聞いた。彼は、その右手と左手を

天に向けて上げ、永遠に生きる方をさして誓って言った。「それは、ひと時とふた時と半時である。聖なる民の勢力を打ち砕くことが終わったとき、これらすべてのことが成就する。」私たちが、ダニエル書で学んでいる、第七十週目の最後の七年の後半の期間、三年半のことです。この時に、聖なる民、ユダヤ人が試みを受けて、それで打ち砕かれて、メシヤを願い求めるようになります。このことを宣言した御使いは、手を天に挙げて、永遠に生きる方を指して誓っています。似たような姿でここ黙示録 10 章の力強い御使いが永遠の方に対して誓います(6 節)。

海の上にも圧倒的な権威と力、地の上にも圧倒的な権威と主権を持っているのですが、これから私たちは獣が出て来て、その背後には竜がおり、竜がイスラエルを表す女を滅ぼそうとし、獣が自分の名の刻印が押されていない者たちを滅ぼすという出来事を読んでいくこととなります。その恐ろしい国において、黙示録 13 章では獣ともう一人の獣が出て来ます。1 節に、「海から一匹の獣」が出て来た」とあります。これは反キリストです。そして 11 節に、「もう一匹の獣が地から上って来た」とあります。これは偽預言者です。海から獣が出て、地からも一匹の獣が出ていますが、その海も地も、どちらも神とキリストが完全に掌握しておられる、主権を持っておられるということです。これは、なんと慰められることでしょうか！この世がどんどんおかしくなり、悪魔の思惑が強まり、反キリストの出現がますます近くなっていると感じるこの頃、しかし全ては主なる神の支配の中で起こっていること、彼らは敗北者なのだということを知ることは慰められます。

そして、「ししがほえるときのように大声で叫んだ。」とあります。主ご自身が大声で叫ばれることは、黙示録の中で多く出て来ますが、それは主が預言によってはっきりと、誰にでも聞こえる形で語っておられる姿であります。「アモス 3:8 獅子がほえる。だれが恐れないだろう。神である主が語られる。だれが預言しないでいられよう。」そして、ホセア書には神が憐れみの心が強くなって、散らされているイスラエルの民を集める時の声として、出て来ます。「ホセア 11:10 彼らは主のあとについて来る。主は獅子のようにほえる。まことに、主がほえると、子らは西から震えながらやって来る。」その力強さと憐れみの両方が表れている声ですね。まさに、CS ルイスが「ナルニア王国物語」で描いたアスランの姿です。十字架に付けられた小羊のお姿もあり、かつ力をもって、憐れみの心をもって来られる獅子の姿です。

3b 彼が叫んだとき、七つの雷がおのおの声を出した。4 七つの雷が語ったとき、私は書き留めようとした。すると、天から声があつて、「七つの雷が言ったことは封じて、書きしるすな。」と言うのを聞いた。

「七つの雷」ですが、七は神を表わす完全数ですから、神からの雷ということです。詩篇 29 篇において、自然界の雷の声が主の栄光を表して、主がまことに王であることを宣言している詩歌になっています。「29:3-11 主の声は、水の上にあり、栄光の神は、雷鳴を響かせる。主は、大水の上にあります。主の声は、力強く、主の声は、威厳がある。主の声は、杉の木を引き裂く。まことに、

主はレバノンの杉の木を打ち砕く。主は、それらを、子牛のように、はねさせる。レバノンとシルヨン
を若い野牛のように。主の声は、火の炎を、ひらめかせる。主の声は、荒野をゆすぶり、主は、カ
デシュの荒野を、ゆすぶられる。主の声は、雌鹿に産みの苦しみをさせ、大森林を裸にする。その
宮で、すべてのものが、「栄光。」と言う。主は、大洪水のときに御座に着かれた。まことに、主は、
とこしえに王として御座に着いておられる。主は、ご自身の民に力をお与えになる。主は、平安を
もって、ご自身の民を祝福される。」主の威厳と力、そして主がすべての王であられること、そして
ご自分の民には平安を与え、祝福を与えられること、これらを示しているのです。

そして興味深いのは、ヨハネがこの雷の声を書き記そうとしたら、天から声がして「七つの雷が言
ったことは封じて、書きしるすな。」と言われたことです。イエス・キリストが啓示される、この啓示の
記録に封じている、書き記すなと言われるのは珍しいことです。ヨハネはこれまで、見たこと、聞いた
ことを忠実に書き記し、証していました。ここで書き記すなと言われていました。これは、「天に
ある栄光の全てを私たちが知る必要はない。これはあまりにも奇しいことであり、私たちの言葉で表
現することもできない」ということでしょう。パウロが第三の天、パラダイスに行ったことを思い出
します。「2コリント 12:4 パラダイスに引き上げられて、人間には語ることを許されていない、口に出
すことのできないことばを聞いたことを知っています。」あまりにも素晴らしいので、人間に語るこ
とも、口に出してもいけないのです。私たちは、全ての事を知りたいという欲求がありますが、いや、
主の御前に赤子のように黙っているということ、礼拝することが必要なのです(詩篇 131 参照)。

2B 誓い 5-7

5 それから、私の見た海と地との上に立つ御使いは、右手を天に上げて、6a 永遠に生き、天と
その中にあるもの、地とその中にあるもの、海とその中にあるものを創造された方をさして、誓っ
た。

御使いは右手を天に上げました。ダニエルの見た御使いは両手を天に上げていますが、ここの
御使いは力と権威を表す右手を天に上げています。そして、「誓っ」ています。誓うときは、必ず自
分より上位の存在に対して誓います。ヘブル書 6章 16節には「確かに、人間は自分よりすぐれた
者をさして誓います。そして、確証のための誓いというものは、人間のすべての反論をやめさせま
す。」とあります。ですから、アブラハムに神が約束されたとき、神はご自分以上にすぐれた存在が
いなかったの、ご自分をさして誓い、「わたしは必ずあなたを祝福し、あなたを大いにふやす。」
と約束されました(創世 22:16-18)。今、御使いが永遠に生きておられる創造主に誓っています。
今から話すことは、確かに起こることなのです。

ところで、黙示録では神が、しばしば、「永遠に生きています方」として紹介されます。4章で四つの
生き物と二十四人の長老が礼拝をささげているとき、「永遠に生きています方に」と何度か出てきま
す。そして神とキリストが、「常にいまし、昔いまし、やがて来られる方」「最初であり、最後である方」

「アルファであり、オメガである方」として紹介されています。永遠というのは、今の時間がずっと続くというよりも、時間を超えた存在であります。ですから、主は、今もおられますし、同時に、昔にもおられますし、そして、将来にもおられる方です。ですから、ご自分のことを、「わたしはある」と紹介されました。イエス様は、父なる神と一体であられる方として、「アブラハムがいた前に、わたしはある。」と言われました。したがって、黙示録でも、主が最後に行なわれることが初めに書かれており、それからその最後に至るまでの経緯を明かしておられます。主は再臨されます。再臨されるまで、まだいろいろな事が起こるのですが、今すでに天から戻ってこられて地上に権威と力と支配を行使するイエス様の姿を描いているのです。

6b「もはや時が延ばされることはない。7 第七の御使いが吹き鳴らそうとしているラッパの音が響くその日には、神の奥義は、神がご自身のしもべである預言者たちに告げられたとおりに成就する。」

「時が延ばされることはない」と言っているのですから、これまでは時が延ばされていた、ということですが。主が戻ってこられるその時が延ばされています。もちろん、父なる神は、その時と日をすでに決めておられるのですが、同時に、「(主は、)あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。(2ペテロ 3:9)」とあります。主の忍耐深さのゆえに、私たちにとって主の来臨が遅いように感じられるときが、しばしばあります。この世はますます不安定になっています。ますます、罪と不法がはびこっています。愛は冷え、自分を愛する者がふえ、人々は自分の都合に合わせて、好き勝手に教師たちを集めています。終わりの時に起こると言われている事柄を、私たちは今、目にしています。ですから、主が今にでも来られるはずなのですが、まだ来られていません。けれども、主は時を遅らせておられるのではありません。

私たちは、主の約束が実現するのが遅いと感じて、いらだつようなことはないでしょうか？ 祈っていることがなかなか、かなえられない。聖書にはこう書いてあるのに、自分の身にはそうになっていない、など、主が時間を延ばしておられるように感じる時があります。ハバククがそうでした。彼は、イスラエルに不法がはびこっているのに、主がおさばきにならないので叫んでいました。けれども、主はこう答えられています。「2:3-4 もしおそくなくても、それを待て。それは必ず来る。遅れることはない。見よ。心のまっすぐでない者は心高ぶる。しかし、正しい人はその信仰によって生きる。」ですから、私たちの目には遅いように見えても、主は時を延ばしておられるのではありません。

ここで強い御使いが天から現われたのは、第七の御使いがラッパを吹き鳴らそうとしていたからです。11章15節をご覧ください、「第七の御使いがラッパを吹き鳴らした」とあります。そこから主が戻って来られる場面が書かれている19章に至るまで、第七の御使いのラッパの部分となっています。第七のラッパは、ダニエルの預言にある「七十週」の第七十週目の後半に当たります。

最後の週は前半の三年半と後半の三年半に分かれますが、黙示録 11 章から 13 章までは、主に、その七年間の半ばを中間地点にして、主が来られるまでの後半部分を扱っています。「その日」とありますが、これは複数形”days”となっています。ですから、短い一日ではなく、ある一定の期間です。

そして、その日には、「神の奥義」が成就する、とあります。神の奥義とは何でしょうか？私たちがこの日本語を読んで連想する意味は、「奥深い意味」ということでしょう。けれどもそうではなく、ギリシヤ語では、「以前は隠されていたが、明らかにされるもの」という意味です。パウロは、教会について、異邦人がイスラエルの祝福にキリストにあって共にあずかることを奥義だと話しました（エペソ 3:3-6）。異邦人の救いには完成があり、完成されたらイスラエルがみな救われるということも奥義だと話しました（ローマ 11:25）。コロサイ書には、「この奥義とは、あなたがた（異邦人）の中におられるキリスト、栄光の望みのことです。（1:27）」とあります。そして奥義という言葉は出て来ませんが、ペテロが奥義のことを分かり易く説明しています。「1ペテロ 1:10-12 この救いについては、あなたがたに対する恵みについて預言した預言者たちも、熱心に尋ね、細かく調べました。彼らは、自分たちのうちにおられるキリストの御霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光を前もってあかしされたとき、だれを、また、どのような時をさして言われたのかを調べたのです。彼らは、それらのことが、自分たちのためではなく、あなたがたのための奉仕であるとの啓示を受けました。そして今や、それらのことは、天から送られた聖霊によってあなたがたに福音を語った人々を通して、あなたがたに告げ知らされたのです。それは御使いたちもはっきり見たいと願っていることなのです。」

預言者たちには啓示があったのです、けれどもその意味を悟ることが出来ません。ダニエルには、御使いは、「封じられている」と言ったのです。しかし、キリストにあって今は開示されています。これはあたかも考古学の発見のようです。私はいつも、ネットのニュースにイスラエルやその周辺で知られていなかった聖書的事実が考古学の発見によって明らかにされるのを驚いています。これまではその存在さえ疑われていたのですが、先端技術のおかげで解明されていなかったものが解明されるようになってきました。元々あったものですが、分からなかったものが明らかにされるのです。そして私たちキリスト者は、キリストにあって解明されている啓示を読んでいるのです。そして実は、まだまだ預言者たちが語っていることで、明らかにしていないものがあるので、それを完全に開示するとここで宣言しているのです。

その奥義は、荒らす忌むべき者が第七十週目の半ばで、いけにえをやめさせるという啓示であります。「ダニエル 9:27 彼は一週の間、多くの者と堅い契約を結び、半週の間、いけにえとささげ物とをやめさせる。荒らす忌むべき者が翼に現われる。ついに、定められた絶滅が、荒らす者の上にふりかかる。」そして黙示録 11 章 15 節には、第七の御使いがラッパを吹き鳴らすと、「この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなった。」という宣言があります。荒らす忌むべき

者が荒廃をもたらすような混乱と混沌、恐れと不安がやってくる時に、それでも主が全てを支配しておられ、全てをキリストの下に一つに集められること、これが奥義であるとパウロは、エペソ1章で話しています。「1:8-10 神はこの恵みを私たちの上にあふれさせ、あらゆる知恵と思慮深さをもって、みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。それは、神が御子においてあらかじめお立てになったご計画によることであって、時がついに満ちて、この時のためのみこころが実行に移され、天にあるものも地にあるものも、いっさいのものが、キリストにあって一つに集められることなのです。」

2A 甘く、苦いことば 8-11

8 それから、前に私が天から聞いた声が、また私に話しかけて言った。「さあ行って、海と地との上に立っている御使いの手にある、開かれた巻き物を受け取りなさい。」9 それで、私は御使いのところに行って、「その小さな巻き物を下さい。」と言った。すると、彼は言った。「それを取って食べなさい。それはあなたの腹には苦いが、あなたの口には蜜のように甘い。」10 そこで、私は御使いの手からその小さな巻き物を取って食べた。すると、それは口には蜜のように甘かった。それを食べてしまうと、私の腹は苦くなった。11 そのとき、彼らは私に言った。「あなたは、もう一度、もろもろの民族、国民、国語、王たちについて預言しなければならない。」

先ほど七つの雷について「書き記すな」と命じた同じ天からの声が、ヨハネに話しかけています。手に持っている開かれた巻き物を受け取ります。そして、「それを取って食べなさい。」と言っています。かつて預言者エゼキエルも、預言を行なう時に同じ命令を受けました。「2:8-3:3 人の子よ。わたしがあなたに語ることを聞け。反逆の家のようにあなたは逆らってはならない。あなたの口を大きく開いて、わたしがあなたに与えるものを食べよ。」そこで私が見ると、なんと、私のほうに手が伸ばされていて、その中に一つの巻き物があった。それが私の前で広げられると、その表にも裏にも字が書いてあって、哀歌と、嘆きと、悲しみとがそれに書いてあった。その方は私に仰せられた。「人の子よ。あなたの前にあるものを食べよ。この巻き物を食べ、行って、イスラエルの家に告げよ。」そこで、私が口をあけると、その方は私にその巻き物を食べさせ、そして仰せられた。「人の子よ。わたしがあなたに与えるこの巻き物で腹ごしらえをし、あなたの腹を満たせ。」そこで、私はそれを食べた。すると、それは私の口の中で蜜のように甘かった。」

神の言葉が書かれているものを食べるということは、それが自分の中に入って、語らなければいけないことを示しています。イエス様は、申命記を引用されて、「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。」と言われましたが、私たちが生きるために御言葉を食べないといけません。それだけでなく、神の言葉を語るためにも食べないといけないということです。エレミヤがその経験をして、どうにもならない葛藤を経た中で預言しているのを見ます。「20:9 私は、「主のことばを宣べ伝えまい。もう主の名で語るまい。」と思いましたが、主のみことばは私の心のうちで、骨の中に閉じ込められて燃えさかる火のようになり、私はうちにしまっておくのに疲れ

て耐えられません。」体の中に主の言葉が入ってしまっている状態です。

そしてヨハネはそれを取って食べました。天からの声が言ったように、口には甘かったのですが、腹に入ると苦かったのです。エゼキエルも同じようにして神から言葉が与えられ、苦々しい思いになっている場面が出て来ます。「エゼキエル 3:14 霊が私を持ち上げ、私を捕えたので、私は憤って、苦々しい思いで出て行った。しかし、主の御手が強く私の上にのしかかっていた。」なぜかという、もろもろの民族、国民、国語、王たちについて、神の裁きの預言をしなければいけなかったからです。11章以降に、さらなるひどい災いが書かれています。これまでの黙示録にあったこと同様、これは全世界的な出来事として及びます。あらゆる民族、国民、国語、王たちに及びます。ヨハネは、これらを語るのはあまりにも苦々しいことですが、御国が来るまでに起こらなければいけない預言は、旧約聖書の中にまだまだたくさんあります。

イエス様が、十字架につけられるとき、「マタイ 26:54 だが、そのようなことをすれば、こうならなければならないと書いてある聖書が、どうして実現されましょう。」と言われたことを思い出してください。ところで福音書は、時系列的に見ると、非常に偏っています。生まれておよそ30歳になられるまでの頃は思いっきり、飛んでいます。そしてその三年半ぐらいの公生涯については、初めの宣教については大雑把に書かれていて、最後の数ヶ月、そして最後の数週間、最後の数日間、そして十字架につけられる前の夜と、次の朝と夕方に至るまでの記述は、かなりの紙面を割いています。なぜなら、そこで起こっている一つ一つの細かい出来事は、すべて前もって旧約聖書で預言されていたからです。人類の贖いという大きな出来事が近づくにしたがって、語られるべきことがなおたくさん増えてきたのです。再臨も同じです。主が再臨されるにあたって、その前に起こらなければいけないことは、再臨が近づけば近づくほどたくさんになっています。イエス様が、「荒らす憎むべき者が聖なる所に立つのを見たならば」と言われたように、ダニエルの預言の第七十週の半週について、聖書はたくさんのことを書いています。第七のラツパが11章で吹き鳴らされるのですが、11章で終わるのではなく19章の主の再臨まで吹き鳴らされるまで続くのです。

神の御言葉には希望があります。それは口に甘いことです。主が全てを支配しておられること、そして主の到来によって正義と平和の国が確立すること。そこに神の至福が備わっていること。全ての悲しみが過ぎ去り、涙もなくなること。新しくされること。これらはすばらしい事です。そして主は必ずそれを行なう、時は遅れることはないと言ましてくださいました。しかし、それを語るにあたって、荒らす忌むべき者が現れて、彼がキリストによって滅ぼされるということまで語らなければいけない。つまり、さらなる悲しみと涙と苦しみと、神の激しい裁きを語らなければいけないということです。私たちはダニエルと同じように、神に愛された者であり、神に愛されているからこそ、予め示されていることがあります。そして、それを語るという使命があります。聖書を学ぶことは甘い作業です。けれども、それを実践すること、つまり教会の使命として福音を語り、またキリストの体を建て上げていくというところには、愛による大きな重荷があります。